

ソ連邦におけるスラヴ主義研究の近況について（一九七二—一九八七年）

清水 昭 雄

1

「近年欧米におけるスラヴ主義研究の進展は目覚しく、単行本の数だけでもゆうに十指を越えるが、これに対してソ連邦での研究の質的・量的貧困はおおうべくもない⁽¹⁾」。一九七六年にそれまでのソ連邦におけるスラヴ主義研究の系譜をたどった長縄光男はこう指摘している。しかし、その後、ソ連邦での研究も進展を見せ、一九六九年に『文学の諸問題』誌上でおこなわれたスラヴ主義評価をめぐる論争⁽²⁾（以後「六九年論争」と呼ぶ）を皮切りに、昨年（一九八七年）までに筆者が知るかぎりでもスラヴ主義に関する一〇冊の研究書⁽³⁾とスラヴ主義者の三種の選集⁽⁴⁾と一六編の論文、書評⁽⁵⁾があらわれた。一方、欧

米でのスラヴ主義研究は一段落したかのように二、三の研究書⁽⁶⁾が目につくのみである。本稿はソ連邦におけるこの進展著しいスラヴ主義研究の概要を紹介するとともに、その問題点を指摘し、あわせて現在までのスラヴ主義研究史の上に占めるその位置を特定しようとするものである。（全ての資料は「注」に挙げ、その末尾に通し番号をふった。引用等に必要な場合は文末にその番号とページを示した）。

2

「六九年論争」以後のソ連邦におけるスラヴ主義研究の最も特徴的な性格を挙げるならば、それは実証的志向の強まりといえる。それまでの研究は一般にひとつのイ

デオロギーとしてのスラヴ主義を評価することに急であつて、スラヴ主義そのものを正確に理解しようとする態度に欠けていた。このような態度にたいする反省は、例えば、一九七八年に出版されたスラヴ主義に関するソ連邦で「最初の体系的文学研究」(④-3)といわれる共同研究『スラヴ主義者の文学観と作品、一八三〇—一八五〇年代』(④)でも明確に述べられている。責任編集者K・H・ロムノフはスラヴ主義研究の方法論を論じた巻頭論文「学問的問題としてのスラヴ主義、探究の課題と原理」において、「六九年論争」でさえもまだ *pro et contra* の原理でおこなわれており、また問題が「社会的モデル」の問題に限定されすぎていると指摘している。ではこの *pro et contra* の態度から実証的研究への移行を促したものは何であったのか。主要な理由として、まず第一に、それ以前のソ連邦の研究に見られなかった豊富な具体的資料を駆使した欧米等の研究があらわれたこと、第二に、それらの研究にソ連邦の支持するイデオロギーにそぐわない部分(その最たるものはスラヴ主義における宗教的要素の強調)があり、その反論にも一定の実証性が必要であったこと、第三に、「六九年論

争」に示されたように、大雑把な論議ではスラヴ主義のように複雑な現象は説明できないことが明らかになったこと、などがあげられるように思う。

こうしてソ連邦において実証的なスラヴ主義研究が続々と登場することになるのだが、その内容の検討に入る前に、形式的な側面について、いくつかの注目すべき点について触れておこう。まず第一に、六九年以降研究に使用される資料が増大し、ついにアルヒーフの使用が始まったこと⁽⁷⁾、第二にスラヴ主義者の選集がソビエト期において初めて出版され始めたこと⁽⁸⁾、第三に、イヴァン・アクサーコフに限ってであるが精密な個人研究があらわれたこと⁽⁹⁾である。

3

ソ連邦のスラヴ主義研究が実証的な形で本格的に開始された点を指摘したが、次にその内容を具体的に検討しよう。

まず当該の期間になされた研究における二つの重要な研究動向を指摘したい。第一はスラヴ主義をできるだけ忠実に理解することを目指すものであり、これを、実証

的かつ脱イデオロギー的傾向を持つ研究動向と規定する。第二のものは、実証的な研究によってスラヴ主義に新たな階級の規定を与えようとするものであり、実証的であると同時にイデオロギー的な研究動向と規定する。

前者を代表するものとして最初に、共同研究『スラヴ主義者の文学観と作品、一八三〇—一八五〇年代』(④)(一九七八年)とЮ・ヤンコフスキの『家父長的貴族的ユートピア』(⑥)(一九八一年)をあげることができ

る。共同研究は、既に指摘したロムノーフの方法論に関する巻頭論文に加えて、E・B・スターリコヴァの「スラヴ主義の文芸、社会評論活動」、ならびに、スラヴ主義の文学領域での活動をそれぞれテーマ別に扱った五編の論文からなっている。スターリコヴァ論文は、この時期のスラヴ主義を社会的活動をも含むより総体的な観点から検討し、スラヴ主義の一般理論(その中心は歴史理論)の保守主義的性格と農奴解放への取り組みを中心とする実践活動の持つ革新的(自由主義的)性格の二重性を指摘している。

この共同研究でなによりも目立つのは、スラヴ主義に

性急な評価を下す前に、まずそれを正しく理解しようとする態度である。ロムノーフは、スラヴ主義をひとつの総体としてとらえ、先行、あるいは、同時代の諸思潮との実証的な比較によって規定することを提唱した。その時代におけるスラヴ主義の姿をそのまま浮かび上らせようとする傾向は全論文に共通であり、スターリコヴァ論文でも階級性への言及は見あたらぬ。また各テーマ別にスラヴ主義の文学領域での活動や主張をできるだけ忠実に再構成しようとした論文によって、われわれは、欧米、あるいは我が国においてほとんど研究されることになかった「スラヴ主義の詩」、「スラヴ主義の戯曲」、「スラヴ主義作家の散文」(いずれも共同研究に含まれた論文の題名)についての一般的な知識を得ることができる。この実証的かつ脱イデオロギー的な研究の登場はソ連邦において画期的なものである。このことはスラヴ主義の文芸批評の保守反動性を指摘するB・И・クレシヨーフの『スラヴ主義者とロシア文学』(②)(一九七六年)と比較する時いっそう明白である。

共同研究の実証的で脱イデオロギー的研究方法はヤンコフスキの『家父長的貴族的ユートピア』において、

スラヴ主義の文学領域以外の活動にまで拡大されることになる。ヤンコフスキーは、ソ連邦での文学、歴史研究の基本が階級的基準にあることを承認しつつ、次のように述べている。「スラヴ主義の諸見解の多様性は、ブルジョア的、地主的というアプリオリで異議を認めない『階級的レッテル』によって規定することはできない」(⑥—364)。こうして、ヤンコフスキーはスラヴ主義の文学領域の問題(この分野の研究は全体の四分の一ほど)のみならず、スラヴ主義の発生、西欧思想の影響、スラヴ主義と専制、スラヴ主義と農奴解放、スラヴ主義とスラヴ諸民族の解放運動、西欧とロシア、スラヴ主義におけるナロード、ナロードとブーブリカ(大衆、公衆)、などの問題を検討し、スラヴ主義の多面性を明らかにしていく。そしてこのかなり総花的な研究によってヤンコフスキーはスラヴ主義に「保守主義的進歩主義」という矛盾した性格を見いだす。彼は「保守主義」的性格を「スラヴ主義」的と呼ぶが、その主たる意味は、神とツァーリと農村共同体への信頼を基盤として農民と貴族との家父長的結合をめざす性格、ということである。また、「進歩主義」的性格とは、農奴解放にたいするスラヴ主

義者の見解に示される「自由主義」的性格のことである。スラヴ主義を複雑な思想の総体として提示しようとしたヤンコフスキーの研究には、その題名からもうかがわれるように、ポーランドの学者、A・ヴァリツキがその研究書『保守主義的ユートピア、ロシアスラヴ主義の構造と変化』^(U)で採用した知識社会学の影響が見られるように思う。しかし、ヴァリツキが、テンニエスの理想型を使用し、スラヴ主義をゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行期に生じた思想と規定したのになんとして、ヤンコフスキーはスターリコヴァと同様に、スラヴ主義に内在する相反的性格を示すにとどまり、その矛盾が何によって生みだされたかについて答えることはなかった。ヤンコフスキーの著書は、スラヴ主義研究をイデオロギー的な断罪から解放し、その複雑で矛盾に満ちた多面性を、統一的な解釈を与えたわけではないが、豊かさとともに十分に示した点で大きな意義を持つと評価しうらだろう。

ここまで実証的で脱イデオロギー的な研究動向を代表する二つの研究について検討してきたのであるが、この流れに属するものとして、さらにB・A・コーシエレフ

の『ロシアスラヴ主義の美的、文学的見解、一八四〇—五〇年代』(⑧)(一九八四年)を挙げることが出来る。

文学研究は本来研究者の思想と感性によって自由になされるべきである。しかし、ソ連邦においては特定の文学的見解が公的に正統とされ、それに異論をさし挟むことは容易ではなかった。ゴーゴリの『死せる魂』をめぐる、ベリンスキーとコンスタンチン・アクサーコフの論争においても長らくベリンスキーの見解のみが一方的に正しいとされてきた(前掲のクレシヨーフにおいてもこの見解が支持されている)。しかし、先の共同研究ではこの見解は若干の変更を被ることになる。この論争に言及して、A・C・クリーロフは、ベリンスキーの見解の原則的正当性を承認しながらも、『死せる魂』に叙事詩的性格を見たアクサーコフの見解は、その後のロシア文学の叙事詩的作品(その最高のものはトルストイの『戦争と平和』である)の発生を促したと評価した。この肯定的なアクサーコフ評価を一層押し進めたのがコーシエレフである。彼は、著書の第三章において、この有名な論争を検討し、一見非常にナイーブに見えるアクサーコフの見解に普遍的な意味を見いだす。アクサーコフはゴ

ーゴリのうちにあらゆる作為を排して現実に没入し、現実をそのままに浮かび上らせるゴーゴリ固有の力(したがってそこには意図された筋とか、効果を狙った作り事が存在しない)を見て、それをホメロスと比較した。一方、ベリンスキーはゴーゴリのうちに没主観性、客観性への尋常でない傾向を見てとり、それに危険を感じたものと解釈される。そこでの両者の対立は、スラヴ主義の文学観対革命的民主主義者の文学観の対立といった図式を越え、現実にたいする二つの態度、つまり、現実の受容と現実の変革という二つの態度の対立が問題とされ、両者は決して一方のみが正しいものとはされえない。コーシエレフは論争の意義をより深い層でとらえたのである。また彼はこの書において、スラヴ主義の文学観、芸術観が明確な基準を有するものであることを明らかにし、それがベリンスキーに代表される見解とは激しく対立するものではあるが、十分に普遍性を持つものであり、クレシヨーフが主張した、スラヴ主義の文学活動は文学史的な意味しかもたず、作品そのものとしての価値を持たないという見解を強く否定した。⁽¹²⁾

4

次に第二の研究動向について述べよう。この新しい動向の持つ特徴は、それまでのソ連邦におけるスラヴ主義研究には見られない高い実証性をそなえたマルクス・レーニン主義的研究によって、スラヴ主義に新しい階級的規定を与えようとした点にある。そこでは政治的、経済的諸問題に対するスラヴ主義者の関与を具体的に考察することによって、彼等の思想を規定しようとする試みがなされている。またこのことと関連して、欧米等の研究で中心を占めた、M・キレーエフスキー、ホミャコフ、K・アクサーコフに代って、Ю・サマリン、A・コシエリョーフ、N・アクサーコフといったスラヴ主義者の研究に重点が置かれ、時期的には、農奴解放への取り組みの時期と農奴解放後のスラヴ主義が特に問題とされている。

この動向を代表する二人の研究者は、E・A・ドゥジンスカヤ女史(ソ連邦科学アカデミー歴史学研究所上級研究員、歴史学博士候補)、とH・N・ツィムバリエフ(モスクワ大学ソ連邦資本主義講座上級講師、歴史学博

士候補)である。

ドゥジンスカヤ女史には著作『社会闘争におけるスラヴ主義』(①)(一九八三年)と三本の論文、「スラヴ主義の理論と実践におけるブルジョアの傾向」(②)(一九七二年)、「ロシアスラヴ主義と在外スラヴ諸民族」(③)(一九七八年)、「スラヴ主義と土地にたいする農民の歴史の権利」(④)(一九八三年)があるが、そのなかで最も注目されるのは、スラヴ主義のブルジョアの性格を論証しようとした研究である。

論文「スラヴ主義の理論と実践におけるブルジョアの傾向」でドゥジンスカヤはスラヴ派の雑誌『ロシア談話』に掲載された諸論文の検討によって、スラヴ主義にブルジョアの傾向が存在することを示そうとした。その要点を以下に箇条書きにして挙げる。(一)スラヴ主義が形成された時期にロシアにおける資本主義の発展は押しとどめ難いものとなり、あらゆる点で決定的なものとなった。(二)地主、領地経営者であり、領地内にワイン工場、砂糖工場などを所有し、市場との繋りのあったスラヴ主義者は右記の点に早くから気づいていた。また彼等は、領地経営の機械化、効率化が農奴制のもとでは

不可能であることを体験的に知っていた。(三) クリミア戦争の敗北とニコライ一世の死は、農奴制を初めとする封建的諸関係が危機的状況にあり、改革が不可欠であることをはっきり示した。一八五六年にようやく出版が許可されたスラヴ派の雑誌『ロシア談話』に掲載された諸論文には、「提案された諸策のブルジョアの本質が非常に明確にあらわれていた」(14—54)。(四) それゆえこの雑誌には、大ブルジョア、B・A・コロレフを初めとする商人階層の支持があった。(五) 『ロシア談話』には鉄道敷設への全面的賛成、自由貿易の際の国内産業の保護政策の必要、軍への食料、軍帽納入における仲介商人の擁護などを訴える論文が掲載された。コシエリョーフはロシアの工業発展がかえって農民のプロレタリアート化を阻止するという見解を発表し、またロシアへの西欧技術の導入、産業の技術化を訴えた。H・アクサーコフはウクライナ市場が大ロシアに加わることによって自由市場が拡大することを強調した。(六) 『ロシア談話』では教育の問題が度々議論されたが、それはロシアの資本主義的發展が要求するものであった。宗教教育の問題も取り上げられたが、「スラヴ主義者は宗教のうち

に農民大衆を抑制し、文化を定められた方向に向けるために必要な要素を見いだした」(14—62)とされる。(七) スラヴ主義者はロシア改造の今後の指針として西欧のブルジョア君主国(英国とプロシヤ)を研究した。(八) 以上のことが示すように、スラヴ主義はロシアを封建的君主国からブルジョアの君主国に改造しようとしたのであり、スラヴ主義とは、西欧主義とならんで、ブルジョア・地主的自由主義である。

ドゥジンスカヤ女史の研究以前にもスラヴ主義にある程度のブルジョアの性格が存在することは、C・C・ドミートリエフやM・レーヴィンによっても指摘されていた。⁽¹⁵⁾しかし、『ロシア談話』という具体的な資料によってそれがここまで詳細に示されたという点で女史の研究は画期的なものである。しかし、問題は、コシエリョーフを編集長とする『ロシア談話』には彼の意向が強く反映しており、『ロシア談話』の方向をもってスラヴ派全体の志向とすることは必ずしも正確とはいえない点にあったように思える。女史の著作『社会闘争におけるスラヴ主義』ではより広範な考察によって、スラヴ主義ブルジョア・地主的自由主義が論証されることになっ

た。そこでの重要な論点を以下に挙げよう。

(一) ホミヤコーフ、コシエリョーフ、B・チエルカスキー、サマーリンらスラヴ主義者の領地経営は、「いくらかの特殊性を持ち、独自のやり方でなされたにもかかわらず、資本主義的と呼びうる共通の特徴によって性格付けられていた」(⑦―82)。(二) コシエリョーフ、チエルカスキー、サマーリンの農奴解放私案は、地主階級の利益を強く反映するものであると同時に、台頭しつつあったブルジョアジーへの妥協を含むものであった。

(三) スラヴ主義の共同体擁護の主張には経済改革への強い配慮が見られ、停滞した共同体への固執ではない。「共同体所有はいかなる農業的改善をも阻止しない」、
「共同体はそれからの離脱を拘束しない。必要な資産を持つてであろう者には離脱は自由に行われうる」(⑦―118)。
さらに、プロレタリアートの発生に断固として反対しながらも、スラヴ主義者にはそれと矛盾する雇用労働力への要求があった。(四) コシエリョーフ、サマーリン、チエルカスキーの農奴解放案審議のための県委員会、起草委員会(コシエリョーフはこれには参加できなかった)での活動の分析は、彼等の真の意図が、地主階級の

被る被害を最小のものにしつつ、農奴解放を行おうとするものであったことを示している。

ドゥジンスカヤの研究には二つの注目すべき点がある。第一に、女史の研究は、既に指摘したことだが、現実への利害的関与によって思想を規定しようとするマルクス・レーニン主義的研究であるが、それが今までにない高い実証性においてなされたという点である。どちらかといえば、思想そのものの考察に重点が置かれていた欧米等の研究と比較して、このことは独自の意義を持っている。例えば、スラヴ主義者の領地経営の実態について、またサマーリン、コシエリョーフ等のスラヴ主義者が農奴解放にいかに取り組んだかについて、われわれは多くの新しい知見を得ることができる。第二に、そこで示された事実によって、スラヴ主義を反動的地主のイデオロギーとする見解はもはや完全に成立しないことが明らかになったことである。既に見たように、スターリコヴァ論文でも、ヤンコフスキーの研究においても、スラヴ主義に自由主義的側面が存在することが指摘されていた。女史の研究はこれに加えて、スラヴ派内に、ロシアの商業、産業の発展に多大の関心を寄せる見解(それをブル

ジョア的と呼ぶべきかは別問題としても)があったことを明らかにしたのである。

しかし、女史の研究にも重大な問題点が存在するよう
に思える。まず第一に、スラヴ主義の持つ他の一面、ヤ
ンコフスキーでいえば、「保守主義的」性格をいかに解釈
するかという点である。ブルジョア的性格の指摘におい
て示された実証的で精密な研究はスラヴ主義のこの側面
に関してはなされていないように思える。例えば、И・
キレーエフスキー、ホミヤコフ、K・アクサーコフ等
がロシア改造の際に目標として描いていた理想社会のイ
メージにおいて(彼等の解釈した)ロシア正教の持つ意
味の大きさは否定できない。しかし、この重大な問題に
たいして女史は十分に答えているとはいえない。「スラ
ヴ主義者にとって最も焦眉、かつ第一義的な問題のひと
つは、当時の支配的イデオロギー形態であった宗教につ
いての問題であった」(⑦—32)。こう明確に指摘しなが
らも、宗教問題にさかれた五ページの論説において、女
史は、スラヴ主義者が当時の正教会に批判的であったこ
と、И・アクサーコフ、コシエリョーフによる現世逃避
の手段としての宗教の批判、あるいは、クリミア戦争以

後スラヴ派内で宗教問題への関心が弱まったこと、ある
いは、コシエリョーフ、サマーリン等が宗教を功利的に
利用しようとしたことの指摘に終始し、本質の問題を回
避している。

女史の研究の第二の問題点は、スラヴ主義研究におけ
る難問のひとつであるが、誰がスラヴ主義者なのかとい
う問題とかかわっている。スラヴ主義とスラヴ主義者の
関係は、いわゆる「鶏と卵」の関係であって、研究を進
めるためには、どちらかいずれにせよ曖昧な規定から出
発せざるをえない。しかし、通常スラヴ主義者としてな
じみのない人物、あるいは、研究の蓄積のできていない
人物をスラヴ主義者として扱う場合には十分な配慮が必
要である。例えば、チェルカスキーの場合はどうか。
もっとも、この問題はスラヴ主義研究が進展し、問題が
周辺の人物に及ぶようになった時不可避免的に生ずる問題
であったとみなせるだろう。

5

ドゥジンスカヤ女史の研究の持つ問題点を克服し、マ
ルクス・レーニン主義的研究方法による新しいスラヴ主

義研究をさらに一歩進めようとしたのがツィムバーエフの新著『スラブ主義』(⑩)(一九八六年)である。前著『農奴解放直後のロシアの社会生活におけるイヴァン・アクサーコフ』(⑤)(一九七八年)でツィムバーエフは、農奴解放後のスラブ主義を代表する思想家以・アクサーコフの六〇年代、七〇年代におけるジャーナリストとしての活動を子細に検討することによって、アクサーコフがスラブ主義理論を新しい状況に対応させるべく努力しながらも、結局それに失敗し、パンスラヴィストに転向してゆく過程を、彼の作り上げた『社会』の理論(теория «обшества»⁽⁶⁾)の放棄の過程と併せて論じた。これは以・アクサーコフに関しても、解放後のスラブ主義に関してもソ連邦においての初めての本格的な研究であったが、ここでツィムバーエフが示した見解は、スラブ主義が封建制の没落から資本主義的生産諸関係確立の時期に成立したブルジョア的志向を持つイデオロギーで、ロシア自由主義の一変種であるとする、ドゥジンスカヤ女史と同様の見解であった。しかし、この書で彼が扱ったのは主として農奴解放以後のスラブ主義であったため、この見解をスラブ主義全体に関して本格的に論証しよう

としたのが『スラブ主義』である。

この書は、資料面での充実、またそれ以前のソ連邦における研究の成果を十分に踏まえ、しかもその問題点を考慮しつつなされた点で、新しいマルクス・レーニン主義的スラブ主義研究の最高の成果とみなしうるものである。またこの意味でこれまでの欧米等のスラブ主義研究にたいするソビエト史学の側からのいわば解答ともなっている。

『スラブ主義』においてツィムバーエフは主に二つの重要な研究を行った。そのひとつは、スラブ主義の基礎研究を行うことであり、それは次の二点においてなされた。(一)スラブ主義に関する研究、論争を有益なものにするため、「スラブ主義」、「スラブ主義者」という術語の発生と、各時代でのそれが使用された際の意味を明らかにし、またその変遷を示すこと。(二)この作業と関係づけながらスラブ主義の発展の時期区分を明確にすること、である。スラブ主義を研究する者は、なんらかの形でこれらの問題に触れるざるをえないのであるが、これを徹底して行うことは、膨大な資料と研究領域における幅広く、かつ詳細な知識を必要とするため、今まで

なされなかった仕事であった。これはソ連邦の学者においてのみ可能な作業であったといえよう。

われわれはここから多くの興味深い事実を知るのであるが、紙幅の関係からここでは、スラヴ主義の規定の問題とツィムバーエフの時期区分の特徴は何か、という重要な二点についてのみ触れておきたい。

「スラヴ主義」、「スラヴ主義者」の規定問題においてツィムバーエフは二つの作業を行なった。第一は、同時代人の手紙、ノート、著作等において、両語が意味(指示)する対象を明示し、それらの語の発生から、時を経るにつれてのその意味内容の変化を示したことである。第二に、彼はこの作業に則って、様々な意味を持つ「スラヴ主義者」から問題にすべき「スラヴ主義者」を選び出そうとした。

前者は文句のない学問的な業績とみなせよう。しかし、この作業はあくまで同時代人によるスラヴ主義(者)の外的規定であって、当時発表されえなかった、あるいは、個人では持ちえなかった諸資料の総合的検討による後代の規定に取って代わるものではないことを銘記しなければならぬ。同時代人の証言の集積からは客観的なスラ

ヴ主義(者)像は決して自動的には浮かび上がってこない。この問題はツィムバーエフの第二の作業において直ちにあらわれてくる。つまり、種々の「スラヴ主義(者)」から問題にすべき「スラヴ主義(者)」をいかに区別するかという問題である。これが可能なためには、既に一定の「スラヴ主義(者)」の概念が獲得されていることを意味し、それは実証的な概念規定に先行している。この方法論上の矛盾はこの種の問題にあっては避け難いものとして許容しうるものであるとしても、チェルヌイシェーフスキーの指摘した「真のスラヴ主義者」⁽¹⁶⁾をもってスラヴ主義者の規定とすることは問題である。なぜなら、この規定は非常に曖昧なものであって、ツィムバーエフ自身が第一の作業で示したように、「スラヴ主義(者)」に常に色濃くただよう民族主義的志向からの相違が明確に示されているにすぎないからである。このように一体誰がスラヴ主義者なのか明確になったとはいえないにもかかわらず、チェルカスキーやブラトノフ・ギャラロフスキーが「真のスラヴ主義者」として登場するのである。ツィムバーエフの作業によってもスラヴ主義者とは誰なのか、という難問は解決されていない。

次に時期区分の問題であるが、ツィムバーエフはスラヴ主義の存続した時期を一八三八／三九年から一八七五年とし、それを四つの時期に分けた。第一期（一八三八／三九—一八四八年）は、スラヴ主義成立の時期である。第二期（一八四八—一八五五年）は、ニコライ一世治下のいわゆる「暗黒の七年」であり、スラヴ主義が確立した時期。第三期（一八五五—一八六一年）は、スラヴ主義者が自己の理想を実現すべく、農奴解放へ向けて積極的に活動した時期。第四期（一八六一—一八七五年）は、解放後の新しい状況にスラヴ主義が適応すべく新しい方向を模索しながらもそれがならず消滅してゆく時期である。

この時期区分の特徴は各時期を画するのが全て政治上、経済上の重大な事件（二月革命、クリミア戦争の敗北とニコライ一世の死、農奴解放）であって、思想上の発展や指導的な人物の死ではない点にある。しかし、スラヴ主義発生の時点や存在の期間に関して、また農奴解放を大きな区切りとすることに關しては、今日の研究水準に照らしてほぼ同意できるものである。

ツィムバーエフが『スラヴ主義』で行ったもうひとつ

の研究は、スラヴ主義の政治観を明らかにすることであった。既に指摘したように、ツィムバーエフはスラヴ主義をブルジョアの志向を持つ自由主義の一変種と規定しているが、この規定の正当性を論証するために、この作業は不可欠であった。しかし、これは容易な仕事ではなかった。そして、この困難を克服しようとする試みの内にツィムバーエフの研究の持つ特質が浮かび上ってくるのである。スラヴ主義||自由主義説を論証するのにはそれまでの通説をいくつも覆さねばならなかった。この点を検討することが、この研究を理解する最良の方途であろう。

スラヴ主義||自由主義説を筆者なりに整理すると次の主要な諸論点から成り立っている。これは全て新しい見解、あるいは、今までに十分研究されなかったものである。

(一) スラヴ主義は、スラヴ主義者自身が規定したような、思想的、社会的運動ばかりではなく政治的運動でもある。(二) スラヴ主義の政治観を代表するものと今までみなされてきた、K・アクサーコフの見解は必ずしもスラヴ派を代表するものではない。(三) スラヴ派の

政治観の主流はサマーリン、コシエリョーフ、И・アクサーコフのものである。(四) スラヴ主義は決して単純なツァーリズム支持ではない。これらの点についてさらに検討しよう。

第一の論点は、以下の諸点において論証された。(一) スラヴ主義はその成立から一八七〇年代の中頃まで、一貫して政府から自由主義的反体制的な活動とみなされてきた。このことはスラヴ主義の運動が明確な政治的意味を持って示している。(二) スラヴ主義の根底に「正教社会」への志向が存在し、それ故、スラヴ主義者が、政治的変革よりも社会的変革の優位を主張したことは事実である。しかし、この社会変革の強調には、革命という最大の政治変革にたいする彼等の恐怖が潜んでいた。つまり、スラヴ主義者のアポリテイズムは政治的性格を持つ。彼等が西欧の革命や社会主義運動を注視していたことはこのことを明確に示している。(三) 正教社会」への強い志向によって、政治的変革の有効性を認めなかったのが、И・キレーエフスキーである。彼はロシアにおける知的変革の可能性を信じ、それ以前の農奴解放を認めなかった。しかし、この「ドン・キホー

テ」的な見解は他のスラヴ主義者によって受けいれられなかった。(四) 社会変革への志向から、スラヴ主義者の最大の関心は農奴解放へと向かうことになった。しかし、農奴解放は、既に指摘した革命回避の最大的手段として、また領地経営者としてのスラヴ主義者の経済的要求(ブルジョアの志向)にそうものであって、この点で極めて政治的な課題であった。

第二のK・アクサーコフに関する論点は次のようである。(一) K・アクサーコフは「四八年革命」直後にスラヴ主義者として最初にツァーリ政府支持を表明した。またこれにもなって自己の政治観の確立に努力することになった。このアクサーコフの活動そのものがスラヴ主義の政治的性格を示している。(二) 一八五六年に彼が書いた『ロシアの内部状況についての覚書』はスラヴ主義の政治観を代表するものとみなされてきたが、実際はそうではない。ニコライ一世の死後、スラヴ派内では共同作業によって状況の全般的な見直しを試みられた。しかし、K・アクサーコフはこの作業から除外され不満を抱いていた。そこで彼は自己の見解を新帝に送り届けた。したがって、この見解は極めて個人的色彩の強いも

のであった。(三) また、この覚書は矛盾を含むものであって、以後スラヴ主義の政治観が徐々に解釈される原因となった。(四) 覚書の中心となったテーゼは「非国家理論 (теория «нероударственности»)」、つまり、ロシア人民は国家的な問題には無関心であり、したがってロシアでは政治変革の可能性はないというものであったが、この理論は、ロシア史における多くの事実を説明しないこともあって、ホミャコフ、サマーリン、И・アクサーコフは受けいれなかった。(五) 『覚書』でアクサーコフは政治理論としては君主政支持を明らかにしたが、同時に激しい現体制批判を行っており、彼のツァーリズムへの態度は不明確である。(六) 以上の理由から K・アクサーコフの見解は不明確であり、また個人的なものであってスラヴ派を代表するものではない。

第三、第四の論点は次のものである。(一) スラヴ派の政治観の主流といえるものは、「正教社会」への志向を持ちながら、ロシアにおける階級対立とそれに続く革命の危険を回避し、同時に地主階級の利害を斟酌し、かつブルジョアの志向をも受容しつつロシアの漸次的改良を目指した者達の政治観である。このグループを代表す

る者として、サマーリン、コシエリョーフ、И・アクサーコフがいる。(二) 彼等はツァーリ主導のロシア改造を目指したが、決してツァーリズムを全面的に肯定したのではない。サマーリンは、ツァーリズムがロシアの現状においては変革を最も公平、かつ効果的に行いうるものとしてその意義を認めた。コシエリョーフ、И・アクサーコフも同様であったが、農奴解放後二人は、ツァーリズムの規制を考える。コシエリョーフはゼームスキイ・サポールの召集を主張するとともに、スラヴ派内でもただ一人貴族の立憲運動に共感を示した。И・アクサーコフは「社会」の創設によるツァーリの善導を企図した(「社会の理論」)。

こうしてツィムバーエフはスラヴ主義をブルジョアの志向を持ったロシア自由主義の一変種(もう一つの変種は西欧主義)と規定する。しかし、ツィムバーエフにあって注目すべきなのは、この一般規定にさらにスラヴ主義に固有な四つの性格を付与したことである。それは(一) 暴力、ならびに上からのもの、下からのものを含めての革命の否定。(二) 政治理論の道徳的性格。(三) ロシアの生活と思想の自律性の強調。(四) ロシア社会

の全階級の利害を一致させ、社会的コンセンサスを獲得したいとする志向、である。

このように、ツィムバーエフは、スラヴ主義の本質を、一方で、内なる理念としての「正教社会」への志向を持ちつつ、他方、現実の階級的な規定性によって、地主的、ブルジョア的である自由主義と理解した。そして、後者の実証的研究において多大な知見をもたらした。しかし、彼の研究の最大の問題点は、前者の「『正教社会』への志向」の実証的研究が極めて弱い点にある（ドゥジンスカヤの研究においても同様であった）。「正教社会」にあらわされるスラヴ主義の理念（宗教思想）とそれと深く結びついた歴史哲学の実証的研究の欠如はスラヴ主義の統一的解釈を不可能なものとしている。われわれが最初に検討した非イデオロギー的な研究において明らかにされていたスラヴ主義の相反する二面性の問題は結局解決されていらない。さらに、ツィムバーエフがスラヴ主義を西欧主義と異なった自由主義たらしめているものとして挙げた四つの性格は全て「正教社会」の理念に起因するものとみなすことができる、という問題もある。この問題は、さらに、自由主義がロシアの性格を持つのか、あ

るいは、スラヴ主義というロシア的な思想が自由主義的な性格を持つのか、という重大な問題とも関係している。いずれにせよ、スラヴ主義における宗教思想と他の活動との内的関連を統一的に把握することが必要である。¹⁷⁾

6

これまでの検討によって、当該期間のソ連邦におけるスラヴ主義研究の動向を次のように結論することができる。ソ連邦のスラヴ主義研究はスラヴ主義を一つのイデオロギーとして不十分な研究によって断罪するという段階を脱し、実証的研究の段階に入った。この実証性を基盤に、スラヴ主義に新しい階級的規定を与えようとする研究動向が生じた。この動向がソ連邦のスラヴ主義研究の独自性を示すものである。この研究はスラヴ主義者の経済的、政治的活動を含む実践的側面に多大な関心を注ぎ、多くの新しい知見をもたらした。この成果を無視しては今後のスラヴ主義研究は不可能である。しかし、ソ連邦の研究は逆に、スラヴ主義の宗教思想や、それと他の活動との関係に関する十分な実証的研究を欠いている。今後のスラヴ主義研究は、欧米等の研究者によってなさ

れた宗教思想等の研究とソ連邦の研究を基礎に、統一的なスラヴ主義像を確立すべき段階に到達した、といえるだろう。

(1) 長縄光男「スラヴ主義研究覚え書—ソヴエトに於けるスラヴ主義研究の系譜—」天理大学学報第一〇四輯 一九七六年。

(2) この論争がわが国に紹介したものとして、安井充平「最近のスラヴ派再評価—『文学の諸問題』誌上の論争」『ヨーロッパ文学研究』(早稲田大学)第二〇号、一九七二年、があげられる。

(3) 谷本一〇三、二〇九。

1. Янковский, Ю. З., *Из истории русской общественной-литературной мысли 40—50-х годов XIX столетия*, Киев, 1972, ①
2. Кулешов, В. И., *Славянофильды и русская литература*, М., 1973, ②
3. Кизиев, В. А., *Из истории идейной борьбы в России в период первой революционной ситуации*, И. С. Аксаков в общественном движении 60-х годов XIX века, Горький, 1974, ③
4. *Литературные взгляды и творчество славянофилов (1830—1850 годы)*, М., 1978, ④
5. Цимбаев, Н. И., И. С. Аксаков в общественной

жизни пореформенной России, М., 1978, ⑤

6. Янковский, Ю. З., *Патриархально-дворянская утопия: Страница русской общественно-литературной мысли 1840—1850 годов*, М., 1981, ⑥

7. Дулинская, Е. А., *Славянофильды в общественной борьбе*, М., 1983, ⑦

8. Кошелев, В. А., *Земельческие и литературные воззрения русских славянофилов (1840—1850-е годы)*, Л., 1984, ⑧

9. Пирожкова, Т. Ф., *Революционеры-демократы о славянофильстве и славянофильской журналистике*, М., 1984, ⑨

10. Цимбаев, Н. И., *Славянофильство (из истории русской общественно-политической мысли XIX века)*, М., 1986, ⑩

(4) 谷本三三、二〇九。

1. И. В. Куревский, *Кришица и эстетика*, под редакцией Ю. Манном, М., 1979, ⑪
 2. К. С. Аксаков, И. С. Аксаков, *Литературная кришица*, М., 1981, ⑫
 3. И. В. Куревский, *Избранные статьи*, М., 1984, ⑬
- (5) 藤本(111頁)
1. Дулинская, Е. А., *Буржуазные тенденции в теории*

- и практике славянофилов, *Вопросы истории*, 1972.
- ⑭
2. Попов, В. П., Социальная природа и функции раннего славянофильства. В кн.: *Проблемы гуманизма в русской философии*, Краснодар, 1974, ⑮
 3. Холодный, В. И., Славянофильство—разновидность зачаточного теоретического антимюнхизма в России середины XIX в. В кн.: *Молодые ученые и славянофильство Томской области в 9-й пятилетке*, Томск, 1975, ⑯
 4. Порох, В. И., И. С. Аксаков-редактор «Дня», В кн.: *Освободительное движение в России*, 1975, вып. 5, ⑰
 5. Китаев, В. А., Славянофиль в первые пореформенные годы, *Вопросы истории*, 1977, № 6, ⑱
 6. Герасимова, Ю. И., Славянофильский журнал «Сельское благоустройство» и его крестьянская программа. В кн.: *Революционная ситуация в России в 1859—1861 гг.*, т. 7, М., 1978, ⑲
 7. Дудзинская, Е. А., Русские славянофилы и зарубежное славянство. В кн.: *Методологические проблемы истории славистики*, М., 1978, ⑳
 8. Носов, С. Н., Важный документ об отношении славянофилов к революции 1848 г., *Вспомогательные исторические Дисциплены*, вып. 11, Л., 1979, ㉑
 9. Рейфман, П. С., К истории славянофильской журналистики 1840—1850-х годов. (Статья вторая) *Учен. зап. Тартуского гос. ун-та*, вып. 491, Тарту, 1979, ㉒
 10. Катеельников, В., Достоевский и Иван Киреевский, *Русская литература*, 1981, № 4, ㉓
 11. Дудзинская, Е. А., Славянофиль и историческое право крестьян на землю. В кн.: *Социально-политическое и правовое положение крестьянства в до-революционной России*, Воронеж, 1983, ㉔
 12. Цимбаев, Н. И., Газета «Москва» 1857 года (на истории славянофильской периодики), *Вестн. Моск. ун-та, сер. История*, 1984, № 6, ㉕
参考文献 (11篇)
 1. Кошелев, В. А., Новые работы о русском славянофильстве, *Русская литература*, 1979, № 1, ㉖
 2. Носов, С. Н., Новые тенденции и старые проблемы (Обзор советской литературы о славянофильстве), *Русская литература*, ㉗
雑誌 (11篇)
 1. В. А. Китаев 著 Н. И. Цимбаев, И. С. Аксаков в общественной жизни пореформенной России ① 雑誌 'Вопросы истории', М., 1980, вып. 7, ㉘

2. Л. Г. Захарова и др. Е. А. Дудинская, *Славянофильды в общественной борьбе*. С. «Вопросы истории», М., 1985, вып. 2. ⑳

(9) 次の三冊を参照。

1. Christoff, P. K., K. S. Aksakov, *A Study in Ideas*, Vol. III of An Introduction to Nineteenth-Century Russian Slavophilism, Princeton, 1982. ㉑

2. Марк, А., *Предметы славянофильства в русской литературе* (Общество Беседа любителей русского слова) Ardis Publishers, Michigan, 1984. ㉒

3. Calder, L. D., *The Political Thought of Yu. F. Samarin, 1840—1864*, Garland Publishing, Inc. New York and London, 1987. ㉓

(7) アルヒーフの本格的使用は一九七八年のツァイトムーフの『農奴解放直後のロシアの社会生活におけるイヴァン・アクサコフ』(通し番号⑤)に始まる。「国立中央文学芸術古文書館(「ЦГАЛИ」)」「ロシア文学研究所手稿部(ИРЛИ)」のアクサコフ・フォンダ、レーニン図書館のサマリン・フォンダの資料が使用された。またヤンコフスキーの『家父長的、貴族的エトピア』(一九八一、⑥)では ЦГАЛИ の И・キレーエフスキーに関するアルヒーフが使用された。

(8) 『注』に示したが、全く不十分なものである。最新 И・キレーエフスキー選集(⑬)でも、彼の宗教思想

神秘思想の解明に重要な『断片』(⑭—276と281)には削除部分がある。

(9) ソ連邦の研究の主流は、スラヴ派全体を問題とする研究であり、一方、欧米等の研究の主流はスラヴ主義者個人の研究である。И・アクサコフに限って個人研究があらわれた最大の理由は、彼の思想に全く宗教的的性格がなにも感じられ、と思われる。

(10) この共同研究について、В・А・コーンチェンが詳しく紹介を行なっている。(⑳)。

(11) Walicki, A., *W Kręgu konserwatywnej utopii. Słownika i przemiany rosyjskiego sławianofilstwa*, Warsaw, 1964, 英訳—*The Slavophile Conservatism, History of a Conservative Utopia in Nineteenth-Century Russian Thought*, translated by Nilda Andrews-Rusiecka, Oxford, 1975. ㉑

(12) さらに実証的で脱イデオロギー的研究に属するものとして、В・А・キターエフの二つの研究(③、⑩)「また今まで研究されることのないなかつたスラヴ派の雑誌」、新聞を中心とした研究(⑱、㉒)、「ドストエフスキーとИ・キレーエフスキーの類似性を実証的に示したВ・カチェリニコフの研究(㉓)等があげられる。

(13) Дмигрен, Д. Д., *Славянофильды и славянофильство. Историк-марксист*, 1941, № 1.
Левин, Ш. М., *Общественное движение в России в*

60—70-е годы XIX в., 11, 1962.

(14) И・キレーエフスキー、ホミャコフの思想において正教思想の持つ意味の大きさについては、例えば、次の論文を参照されたい。

拙稿、「古典的スラヴ主義者が提唱したロシアの原理について」、(イヴァン・キレーエフスキーとアレクセイ・ホミャコフの場合)、工学院大学研究論叢第二四号、一九八六年。

(15) 「社会」とはナロードの「意識」を代表する部分であり、ツァーリを善導する。「社会」はナロードとツァーリを媒介するものと考えられた。

(16) ツィムバーエフは「真のスラヴ主義者(Истинные славянофилы)」について著書一九ページの脚注で次のようにしか述べていない。『真のスラヴ主義者』とは、『ロシア文学のゴゴリ時代概観』において、チエルヌイシェーフスキーが提出した術語であり、それは、アクサーコフ兄弟、コシェリョーフ、キレーエフスキー兄弟、ホミャコフらの『ロシア社会における最も教養のある、最も高貴な、最も才能のある人々』を、『自分達の見解の空虚さ、無益さを隠すために、スラヴ主義者から借用してきた断片的でわけのわからなくなった思想を大げさにふりまいて空威張りしている』連中から区別するためのものであった」

(16—19)。

(17) 更に、この研究動向に属するものとして、ペリンスキ

ー、ゲルツェン、チエルヌイシェーフスキー等の革命的民主主義者のスラヴ主義(者)にたいする見解をよく調べあげ、要領よくまとめたビロシコーヴァの著書(9)、ホミャコフの『フンボルトについて』が、著者の二月革命に関する考察の産物であったことを論じたノーソフの論文(21)がある。

またツィムバーエフの論文(25)は、K・アクサーコフが中心となって発刊した週間文学新聞「世評」(一九五七年)に掲載されたアクサーコフの論説が、通常指摘されるような断片的なものではなく、全体として内的なつながりを持っており、彼の思想の中核をよくあらわしたものであることを論じている。

ソ連邦の主流となった実証的な研究動向とはいささか異なるものとしてポポフの論文(15)がある。ポポフは初期スラヴ主義を本質と機能の側面にわけ、その本質を中心に考察した。彼によれば、スラヴ主義の本質とは共同体に関する見解であり、他のすべての活動はこの本質との関係から説明される。よく知られた事実の新しい解釈によってスラヴ主義の解明を目ざしたものである。

最後に、スラヴ主義そのものを中心に考察したものであるため本稿のリストには挙げなかったが注目されるものとして、B・コージノフのドストエフスキー生誕一六〇年(一九八五年)を記念する論文がある。コージノフはロシア文化、文学の全人類性への志向を広くロシア文化の中に

さぐったが、その文脈でスラヴ主義が考察され位置づけられて
いる。スラヴ主義の専門的で厳密な研究とならんで、
スラヴ主義をより広い見地から考察する研究も、C・ノ
ソフが指摘するように(27—209)不可欠である。

Кожин, В. И. Назовет меня всяк сущий в ней язык
……, *Наш современник*, 1981, № 11.

(一橋大学大学院博士課程)